令和3年度　学校評価シート

学校教育目標	「向上心」 ー夢を抱き　自ら学ぶ　心優しくたくましい生徒の育成ー	重点目標	・子どもたちが楽しく学べる安心・安全な学校 ・教職員がいきいきと教育活動ができる学校 ・保護者・地域から信頼される学校

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	具体策	中間評価	自己評価 4点満点	成果及び改善策
Ⅰ学校運営	1　開かれた学校づくり 小林	家庭・地域と情報を共有し、連携を図る。	教育活動に関する情報、生徒の様子を家庭・地域へ提供する。また、家庭・地域の思いや要望を吸い上げる機会をもち教育活動に生かす。	・定期的な情報提供や家庭・地域の思いを吸い上げる機会が、コロナ禍のため難しくなっていることを踏まえ、次の3点に重点を置く 〇ホームページの定期的な更新（特に生徒の様子） 〇学校だより、生徒指導通信、学年・学級通信による情報提供 〇数は少なくなるが、オープン後のアンケートの活用	・ホームページの更新には、ムラがあった。コンスタントに生徒の様子を伝えたい。小中一貫校建設の様子などもホームページにあげていきたい。 ・便り等はコンスタントに出したい。学校だより、生徒指導通信は同じ週に出すのが効果的だと思う。 ・オープン後のアンケートがとれたのは、体育大会だけでした。	3	・行事ごとのときには、HPが更新できたが、ムラがあった。コロナ禍で保護者・地域の方が学校に来ることができないので、積極的な発信が必要である。 ・学校からの通信、便り等はコンスタントに出したい。学校だより、生徒指導通信は同じ週に出したい。 ・保護者アンケートは体育大会の時だけだった。
	2　危機管理体制の整備 小林	危機管理への体制整備、危機対応能力の向上を図る。	・災害や不審者対応について、訓練を実施し、より実効性のあるマニュアルとなるように見直しを行う。 ・安全点検や教職員研修など、危機管理への体制整備や対応能力の向上を図る。	・想定される場面における訓練のシュミレーションを実施し、特に教職員の対応能力向上を図る。 ・今年度は、感染症対策について危機管理体制の整備に力を入れる。（慣れによる取組の後退がないように）	・コロナ禍で、生徒の避難訓練を優先させたので、教職員の訓練は十分でない。来年度の課題としたい。 ・感染症対策はおおむねしっかりとできている。感染者が少なくなっている今取り組みが後退しないようにしたい。	3	・教職員の訓練は十分にできなかったが、校内研修で訓練を行うことを来年度の課題としたい。 ・感染症対策はおおむねしっかりとできている。感染が拡大している今、さらなる危機意識をもって防止対策に当たる必要がある。
	3　学校業務改善の推進 小林	業務内容を見直し、意識改革により勤務時間の適正化を図る。	定時退勤日の完全実施を継続できるよう、教職員の意識改革を図る。 会議、委員会のタイムマネジメントを進め、効率化を進める。	各自、業務を計画的に行う、業務に軽重をつけるなどタスクマネジメントに取り組む。 会議資料の事前配布により、各自が事前確認をする。会議のレジメに所用時間を入れるなどをし、会議の時間が1時間以内になるようにする。	・会議の時間、朝の打ち合わせの時間が短くなっている。 ・勤務時間の適正化に意識を持って取り組んでいる職員が増えている。	2	・会議の時間の短縮、勤務時間の適正化への意識の高まりなど成果があった。 ・新しい教育課題への対応、ICT活用、リモート授業などのコロナ対策など、業務量は着実に増えている。
	4　教職員の資質の向上 小林	魅力ある授業の展開と、個性を尊重した指導の能力の向上を図る。	教職員の資質向上を目指し、校内研修を計画的に実施する。 協同的な学びを取り入れた授業を実践し、教師の授業力の向上と予防的開発的な生徒指導の能力の向上を図る。	協同的な学び、QU・カウンセリングマインド・特別支援教育について校内研修を行う。 2人組による授業研究の中で授業力の向上を目指す。	・校内研修に十分な時間を割けていないと感じる。各担当から必要な研修を挙げてもらい、ノー部の日に組み込んでいきたい。 （ICT、特支、協同的な学び、不審者対応、校外研修の報告など） ・ICTに関しては、教職員同士が情報交換をし、技能・資質の向上を行っている。 ・ペア研究については、研究推進の項目を参照。	3	・校内研修に十分な時間を割けていないと感じる。各担当から必要な研修を挙げてもらい、ノー部の日に組み込んでいきたい。 （ICT、特支、協同的な学び、不審者対応、校外研修の報告など） ・ICTに関しては、特別に研修の時間をとらなくても、教職員同士が情報交換をし、技能・資質の向上がはかれている。教科指導、学級経営についてもOJTを図りたい。
Ⅱ生徒指導	5　生徒指導 村上	・原則的で具体的な指導方針のもと、組織で動く生徒指導 ・予防と初期対応を適切に、迅速に行う生徒指導	・年度当初の生徒指導方針を基本原則にしつつ、状況に応じて修正と改変を加え、共通理解して指導にあたる。 ・職員会議や生徒指導委員会、学年会議を生かし、日常の生徒指導に生かす。 ・保護者や地域、関係機関との連携を強化し、生徒の成長につながる指導を行う。	・各種会議において、生徒の実態把握と予防的対応について協議する。担任や担当者で問題となっていることを抱えこまず、組織で対応できるようにする。 ・日常の生活ノートや『困ったことカード』、『いじめ実態把握調査』やQ－Uテストなどの調査を生かし、生徒の内面理解と実態把握に努め、問題となることの早期発見・早期解決の手だてを講じる。 ・生徒の情報を、通信や面談の機会を生かして積極的に発信する。また、家庭や地域などからの情報収集に努める。	・生徒指導委員会において、生徒の情報交換、共通理解事項の確認、徹底をすることで日々の学校生活につなげることができた。また、各学年の総務、生徒指導担当、担任と情報交換を図り、生徒理解に努めることができた。 ・各種アンケート等で生徒の実態を把握し、内面理解に努め、各学年で予防と早期対応できた。 ・実態調査等の集計結果は、教師はもちろん通信で家庭や地域に発信することができた。	2	・刑法犯行為の事案が少なく、安心して学校生活を送っている生徒が大半を占めている。しかし、不登校生は増加しており対策が必要である。その背景には、インターネットの発達により使用時間のコントロールできないことが1つの要因であると考えられる。日常生活で時間の使い方を学ばせることが大事であると考える。 ・困っていることを内に秘めている生徒や保健室利用の状況を考えると悩みや困っていることは少なからずあり、事案を見逃すことがないように取り組む必要がある。特に生徒同士の人間関係は見えにくいので、トラブルがもつれてしまうことがある。たくさんの目で見、問題行動（特にいじめなど）が早期発見できるようにするための具体的な手法を考えなければいけない。 ・年度の後半は通信を積極的に発信することができなかった。
	6　生徒支援体制の構築 心の教育　　中川	・規律ある生活習慣を確立し、お互いを大切にする温かい集団づくり。	・生徒の実態を把握して、生徒一人一人のニーズに応じた的確な生活指導や生徒支援に努める。 ・教師間や関係機関との連携を図りながら、教育相談や日々の取組を通じて、個々の生徒に応じた支援に努める。 ・予防、開発的な生徒支援のあり方を探り、実践する。	・コロナによる環境の変化による生徒の困り感を支援する。 ・不適切な欠席を防止する毎日の取組を継続するとともに、全生徒を対象とした教育相談週間を学期に一度ずつ持ち、生徒の内面理解、心の問題の早期発見とカウンセリングなどによる早期対応に努める。 ・QUに関する研修を実施し、学校全体で継続的かつ体系的にQUを活用し、予防的・開発的支援につなげる。	・「困ったことカード」や教育相談、QU研修、また日頃の生徒観察等で、生徒の内面理解に取組むことができた。 ・不登校生徒の減少としては表れてはいないが、教室復帰が出来たり、別室を利用したり、適応教室に通い始めたり、と、変化が見られた生徒も少なくなかった。 ・SC、SSW、福祉総務課と連携した取組ができたが、多くの人が関わる不登校生徒は、ケース会議を定期的に行うことが必要である。 ・兵庫教育大学の上田先生も、個別事案について相談できる機会を設定する。	3	・7月に四辻伸吾先生を招いて、「QUの見方と活用について」の研修ができた。生徒へのQUアンケートは2回行い、7月と1月に各学年で検討会をし、生徒の実態把握や学級経営等に活かすことができた。 ・不登校生徒は増加傾向にあるが、適応教室、別室登校、放課後登校等のそれぞれの登校の仕方で支援を受けている生徒はその半数以上になり、生徒の居場所づくりや環境づくりに各方面で尽力してもらった。 ・2学期に不登校生徒と保護者にアンケートを取り、現状や今後についての不安や要望等を知ることができた。 ・2月に兵庫教育大学の上田先生を招き、1，2年生の不登校生徒についての個別ケース会議を開催した。今後の手立てを協議し、有効な支援の手立てを示唆していただき、実行中である。
	7　清掃活動 佃	・生徒一人ひとりが意欲的に清掃に取り組むことができる環境づくり	・清掃活動に対し、達成感や充実感を感じることが出来る生徒の育成	・美化コンクールに教室以外の場所も入れ、評価、点検することで生徒の意欲を高める。 ・トイレコンクールを設定し、点検することで生徒の意欲を高める。 ・窓掃除の日を設定する。 ・大掃除でのチェックリストの活用	・美化コンクールやトイレぴかぴかコンクールの実施や大掃除でのチェックリストの配布等、継続的に行うことができた。 ・毎日の清掃では、時間いっぱい持ち場をきれいにすることを意識付けたい。（階段の隅っこや窓にも目を向けるなど） ・コンクール等を実施することで、学級全体や学年全体で協力して取り組むことを狙いとしているが、さらに呼びかけをする必要がある。	3	・計画通りにコンクール等を実施できなかったが、専門部員をはじめ、生徒も美化コンクールやトイレぴかぴかコンクールへの意識が高まってきたので今後も定期的に行っていきたい。 ・各行事前の清掃活動では、生徒たちがそれぞれの持ち場をきれいにしようと意欲的に取り組む姿が見られた。 ・日々の清掃活動においては、時間いっぱい持ち場をきれいにする、隅々まで掃除をするという意識が低い生徒も見受けられた。担当教師がいなくても自主的に取り組む姿勢を養っていきたい。
	8　研究推進 古角	生徒が主体的・協同的に課題解決に取り組むための授業づくり、集団づくり～学びの自覚化を目指して ～	・授業力の向上 ・授業形態の改善 ・協働を楽しめる教師集団の構築 ・研修体制の充実	・ペア研究の実践 ・授業のねらいと振り返りの設定 ・授業のユニバーサルデザインの模索と学習規律の徹底 ・家庭学習の定着を図るための取り組みを推進する。 ・「協同的な学び」を活用した学活の授業見直しと改善 ・ICT機器の有効的な活用・思考ツールの効果的な活用	・ペア研究の進捗状況が分かりづらい。各学年で、いつやったか等の集約をしてもらう。事後研究シートを研究推進に提出してもらうことの徹底を図る。 ・ICT機器の活用は今年度だけでもかなり進んだと言える。各教科で普段の授業から生徒に活用させることができていた。	3	・授業のねらいと振り返りの設定は各授業者が意識して取り組み、ほぼ一つの型として定着させられた。 ・ICT機器の活用は昨年度から多くの先生方の努力によって活用できる幅を広げている。教師側の操作だけでなく、生徒側の操作性も向上しており、タブレットの活用に抵抗感なく取り組めている。 ・ペア研究の実践に関しては、曖昧な部分が多かったこと、進捗状況の把握が難しかったことが課題として挙げられる。今後は、事後研シートを提出してもらい、それをまとめたものを研推から報告する形で改善していきたい。 ・家庭学習の推進を図る取り組みも、生徒会学習部などと連携して考えていきたい。

令和3年度　学校評価シート

学校教育目標	「向上心」 －夢を抱き　自ら学ぶ　心優しくたくましい生徒の育成－	重点目標	・子どもたちが楽しく学べる安心・安全な学校 ・教職員がいきいきと教育活動ができる学校 ・保護者・地域から信頼される学校

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	具体策	中間評価	自己評価 4点満点	成果及び改善策
Ⅲ　学習指導	9　基礎基本の定着と個に応じた学習指導の徹底　藤本	・基礎学力の定着と向上 ・個に応じたきめ細かな指導の充実	・学力の確実な定着や個性の伸長を図る ・一人ひとりの学習状況に応じた指導の工夫を行う	・生徒の興味・関心・適性などを的確に把握し、個に応じた指導を行う。 ・学ぶ意欲を向上させるための指導技術の工夫・改善を図る。 ・通常の集団ではできない「少人数ならでは」の指導方法を行う。 ・生徒一人一人の自己実現を支援するため、教員間で密な情報交換を行うとともに、積極的な生徒理解に努める。	・基礎・標準のクラス分けをすることにより、2年生の苦手だった数学で、少しずつ少人数学習の成果が上がってきている。特に基礎クラスの生徒は、発表や質問がしやすい、自分にあったペースで授業を受けることができるなど、少人数授業の効果を実感できている。課題として、基礎・標準の選択は希望制にしているが、本来基礎クラスでがんばってほしい生徒が標準クラスにいたり、その逆の場合も多いため、年度当初のガイダンスと、個別の教育相談を丁寧に行っていく必要がある。また、基礎クラスに行きにくい生徒に「基礎」という名前を嫌がっている生徒もいるため、呼び名の変更も考えていきたい。	3	・基礎クラス・標準クラスに分かれての授業についてのアンケートの結果によると、基礎クラスの100%の生徒が、教師の関りが厚く、理解できるまで丁寧に教えてくれるなど、その効果を実感している数学が苦手な生徒にとって基礎基本の定着につながっている。また、標準クラスの生徒の11%が合同クラスの方がよいと感じており、その主な理由として、教え合いができる、たくさんの人と意見交流ができると書いているが、標準クラスでのよさが実感できていない生徒もいると考えるため、個に応じた学びの更なる工夫が求められる。また、研究推進の「ICT機器の有効な活用」「授業のユニバーサルデザイン」との関連づけていきたい。 ・基礎・標準の呼び名について、クラス選択をする場面での抵抗を少なくするため、名前の変更を提案したい。Sクラス（スモール＝少人数）、Lクラス（ラージ＝大人数）とすることで、基礎という呼び名に対する抵抗感がなくなればよいと思う。
	10　学習タイムの実施　大篠	・基礎基本となる知識及び技能の着実な定着 ・望ましい学習習慣の確立	・学級全体で、共通の課題に取り組む雰囲気づくりを行う。 ・1週間の取組に対して検定を実施することで、目的をもって取り組ませ、学習意欲を高め、達成感や充実感を味わわせる。	・学習部委員を積極的に動かし、学習の雰囲気づくりを行う。 ・国語・数学・英語・社会・理科の5教科から教科の偏りがなるべく出ないように取り組み、5日間を1クールと考え、金曜日に検定を実施する。	・クラスによって学習部員が積極的に動けているクラスとそうでないクラスに分かれているため、学習部員を中心として動いていけるように、委員会活動等を通して意識をもたせる必要がある。 ・各教科ごとに単元を絞って学習するため、検定に向けて意欲的に取り組めている生徒が多い。	3	・生徒会学習部会で、学習部員が中心となって呼びかけたこともあり、後半はほとんどのクラスで学習タイム期間は集中して学習が出来た。 ・紙媒体中心の教科もあるが、タブレット学習を取り入れる学年や教科が増え、個別の状況に応じた学習を進めることが出来ている。また、生徒たちにとっても、タブレット学習に慣れる機会にもなった。ただ、各教科によって、紙媒体なのかタブレット端末なのかの偏りはある。
	11　総合的な学習の時間　則包	・「自己を見つめる」ことを基盤に何事にも、向上心を持って取り組、進路を自ら切り拓く力をつける。 ・SDGsの取り組みを絡め、、「個性を認める」活動実践	「視野を広げる」 ・過去・現在・未来に着眼し、様々な事象について考えを深めていく。。 ・見聞を広める修学旅行にする。 ・自己を見つめながら進路学習を進める。	・修学旅行への取組（班別自主研修計画の立案・実施） ・進路を自らの手で切り拓くための取組（目標の設定、オープンハイスクールへの取組、進路情報の的確な把握）	・1学期は修学旅行が延期、行先変更となったが、平和学習に重きを置き、日本の過去・現在・未来を考えさせることができた。私たち学年団も、改めて平和教育の大切さを感じることができたのではないかと考える。 ・進路決定にむけて、生徒一人一人が自己を見つめながらOHSに積極的に参加できるよう、計画的に情報を発信し、保護者にも協力を得ることができた。	3	コロナ禍ではあるが、様々な行事毎に自己の成長を見取り、それらを積み上げながら授業を進めることができた。また、お互いの成長も認める中で、人間関係を構築したり、自分の生き方を考えたりさせることもできたと思う。平和学習、文化遺産の学習を通して日本の過去、現在、未来を考えさせ、向上心を持たせながら進路学習にも取り組んだ。 ただ、SDGsに関わる授業計画ができなかったのでが今後計画し、取り組ませたい。
	11　総合的な学習の時間　澤田	・「生き方」を学ぶ。	・ものづくり体験学習を通して、技能の素晴らしさ、楽しさ、難しさを感じ取る。 ・「トライやる・ウィーク」に主体的に取り組み、自分の将来の進路を考える。	・将来の自分を見つめ、なりたい自分を考える。 ・「トライやる・ウィーク」活動場所を選択し5日間の活動、事後の振り返りまで、主体的に取り組ませる。 ・体験を通して学んだこと、感じたことを新聞にまとめる。	・ものづくり体験では、生徒は興味をもってそれぞれの活動を行った。活動後は、「ことまど」を使用して学んだことを班新聞にまとめた。	3	・事業所でのトライやる活動が新型コロナの影響でなくなったが、ものづくり体験学習や3学期に行った進路学習等を通して、生徒の進路に関する意識は高まったと感じる。 ・予定が変更になったところは、その都度、学年で話し合いながら代替行事も含めて取り組みを進めた。 ・事業所でのトライやる活動がなくなった分、社会とのつながりを体験するという部分がどうしても弱かったように思う。今後、機会があればそこを補足できる取り組みを行いたい。
	11　総合的な学習の時間　井澤	・「共生」のための力を育む。	・地域の福祉や人権問題について、学習し体験する中で、課題を見い出し、解決する力を養う。 ・学習内容をまとめたり発表する中で、自分の考えや思いを伝えたり、他者の考えや思いを受け止めたりする力を高める。	・加東市在住の障害のある方の話を聞く。 ・車いす、アイマスク、インスタントシニア、手話体験をする。 ・学習の成果を各学級でグループごとに分かれ、タブレットを活用してP. Pを作成、発表へとつなげる。	・福祉に関係した加東市及びテーマ別の講師の方の話をしっかり聞 き、現状や課題を知り、自らの考えを深める機会となった。 ・コロナの影響もあり、予定していた車いす、アイマスク、インスタント シニア、手話の体験をすることができなかった。 ・各学級でグループごとに分かれ、タブレットも活用して、学習の成果 を模造紙にまとめ、発表することができた。	4	【成果】 ・新型コロナウィルスの影響もあり、活動に制限が生まれたが、臨機応変に対応し、ほぼ予定通り計画を遂行することができた。 ・生徒一人一人が福祉の活動を通して、必要性や大切さを学ぶことができた。 【課題】 ・新型コロナウィルス感染拡大による福祉関係の講師派遣や体験活動に制限があり、今後もどのように取り組んでいくか検討の余地がある。
	12　特別支援教育　井ノ口	・インクルーシブ教育システムの推進 ・校内支援体制の充実	・サポートファイルと個別の指導計画を作成し合理的配慮に活用する。 ・個に応じた指導を実施し、校内支援体制を充実させる。 ・支援学級生徒と通常学級生との交流を図り、インクルーシブ教育を推進する。	・特別支援学級在籍生及び通級指導等、通常学級在籍で支援の必要な生徒についても、早期に実態把握を行い、サポートファイルを作成して支援を行う。 ・職員の研修や共通理解の機会を設け、職員の連携の下、支援を実施する。 ・特別支援学級生徒と通常学級生徒の交流や共同学習を積極的に進める。	・通常学級担任や特別支援学級担任、通級指導担当等、各学級担任がサポートファイル作成し、支援に尽力している。 ・特別支援教育担当、通級担当、生徒支援担当、SCやSSWと連携しながら支援を進めている。 ・支援学級生徒が交流学級で学校行事等に充実して取り組めている。 ・家庭環境に不安のある生徒が登校できていない。SSWや不登校担当、担任が連携をとり、対応に当たっている。 ・特別支援学級の教科担当同士で連携が取れていない。	3	・サポートファイルについて各担任が作成や保護者との連携に力を注いだ。 ・通級教室で学習した生徒は3名であった。心の安定を図る活動を通して、少しずつ安定した生活を送ることができてきた。 ・来年度から支援学級へ入級する生徒は、入級体験を経て通常学級から支援学級の移行がスムーズにできた。 ・支援学級生徒が交流学級で学校行事等に意欲的に参加できた。 ・登校できてない生徒に対して、校内で連携を取り、家庭訪問をたびたび実施し、支援を続けた。 ・特別支援学級の教科担当同士で連携が図れるように打ち合わせ等の機会を設ける。

令和3年度　学校評価シート

学校教育目標	「向上心」 ー夢を抱き　自ら学ぶ　心優しくたくましい生徒の育成ー	重点目標	・子どもたちが楽しく学べる安心・安全な学校 ・教職員がいきいきと教育活動ができる学校 ・保護者・地域から信頼される学校

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	具体策	中間評価	自己評価 4点満点	成果及び改善策
	13　キャリア教育　澤田	・キャリア教育の推進と推進体制の整備キャリアノートの活用	・キャリアプランニング能力の育成を図る。 ・キャリア形成にかかる体験及び学習活動における事前、事後の指導の充実。	・キャリア教育指導資料の活用を行う。 ・保護者、地域、関係機関との連携しキャリア教育の重要性について情報を発信する。	・1年生は、自分史新聞を作成し、今までの自分の振り返りと今後の自分について考えさせた。 ・2年生は、3学期に進路学習を行う予定である。 ・3年生は、平和学習を行い、過去の事や世界で起こっていることに意識を向けさせた。夏休み及び2学期のオープンハイに積極的に参加させ、進学への意識を高めさせた。	3	・各学年で段階に応じた、キャリア学習活動を行うことができた。 ・キャリアパスポートも各学年で記入し、次学年に引き継げている。
	14　道徳教育　谷口	・対話的な学びを通して生き方について考えを深め、議論する道徳教育の実践 ・生徒か成長を実感し、意欲的に学ぼうとする評価	・自尊感情をはぐくみ将来に夢を持って生きていこうとする態度を育成するとともに、互いに尊重しあう温かい思いやりの心を育む。 ・体験活動や表現活動を取り入れ、自己を深く見つめ、人間としてよりよく生きるための人間力を伸長する。 ・生徒一人一人をよく観察し、ワークシートを利用しながら、具体的な文章による評価を行う。	・ローテーション授業を行い指導力の向上を図る。 ・年間指導計画の別葉を活用して、教科においても指導の工夫を図るようにする。 ・生徒のワークシートを全て保管することや、板書を記録するなど、授業における生徒の具体的な発言や感想をまとめておく。また、発言がなかった生徒もどれだけ道徳的価値に迫れたかをつかめるようにする。	・各学年でローテーション授業を実施することができている。授業実践と参観授業を相互に行うことにより、指導力の向上を図ることができた。 ・10月段階で別葉の作成は進んでいない。 ・ワークシートを活用できた。発言がなかった生徒に関してはワークシート内の感想より道徳的価値に迫れたかどうかを判断することができた。今後は、タブレットを取り入れた授業展開を考えていきたい。	3	・中間評価に引き続き各学年でローテーション授業を実施できた。授業実践と参観授業を継続することで、様々な角度から生徒の道徳性を培うことができた。 ・情報担当と協働して、タブレットを効果的に活用した授業展開を積極的に進めることができた。実践記録を増やしていき、道徳的価値に迫っているかどうかをどのように評価するか協議することを今後の課題とする。
	15　人権教育　高見	・人権教育の推進体制の充実	・偏見や差別を許さず、人を大切にし、お互いを認め合う生徒の育成に努める。 ・校内研修や行事を通して教職員や生徒の人権意識の高揚を図る。 ・国際理解、部落差別を含めた様々な人権課題について、計画的、継続的に、指導に取り組む。	・人権作文や標語の作成、授業や行事を通して、人権について考える機会を増やす。 ・コロナ禍でも実施できる行事については様々な面で工夫しながら生徒の達成感や自尊感情を高める役割を果たしていけるように工夫する。	・人権作文や人権標語では、生徒たち一人ひとりが自分が興味を持った人権課題について考え、学年によってはタブレットで具体的な数値や報道ついて調べながら書くことができた。今後は、その作品を校内掲示したり、発表する機会を持ったりして、生徒の人権意識の向上に努めたいと考えている。 ・行事の中での人権教育については、昨年の経験や反省を踏まえ、規模を縮小しつつも、生徒たちが達成感や自己有用感を感じられるような内容で実施できたと考える。	3	・人権標語については、校内に優秀作品を掲示し人権意識の向上に努めることができた。また、人権作文については今後ケーブルテレビでの放送予定日を全校生徒に周知することで視聴を促し、人権意識の向上に努めたい。 ・コロナ禍での行事については、各担当者を中心に感染防止に努めながらも、生徒の成長を促す内容となった。今後もその時の状況に合わせながら、学校現場で臨機応変に対応することが課題である。
	16　防災教育　津賀尾	・教員の防災教育に係る指導力、実践力の向上 ・防災意識の高い生徒の育成	・防災教育と防災訓練を年間計画に従って実施する。 ・自分の命を守る(自助)ことのできる生徒の育成を図る。 ・共助の気持ちを育む防災教育の推進する。 ・災害時の臨機応変に対応できる実践力を高める。	・避難訓練を形式的なものだけするのではなく、違った想定をして行う。(生徒・教員) ・各自の役割を防災計画でしっかりと確認し、指導ができるようにする。(教員) ・臨機応変に対応できるよう工夫した訓練を行う。(生徒・教員)	・10月時点で避難訓練等を実施できていない。 ・11月、1月と予定をしているが、まずはしっかりと基本的な動きの確認ができるようにしたい。 ・教員の動きの確認も含めて考えていく。	4	・コロナ禍の中、工夫をして避難訓練や防災教育講演会等を実施することができた。 ・災害発生時の生徒の判断力を養うための訓練なのか、災害発生時の教員の動きを考えるための訓練なのか、その両方なのか、という部分を明確にし、訓練を実施できるようにすると、より充実した訓練になると思われる。 ・避難訓練に対する抵抗感(時間等)を少なくするために、訓練のみ(講評や事前指導なし)を行うことも検討する。
	17　健康教育　村田	健康で安全な生活を送るための知識を身につけ、実践しようとする生徒の育成 ・喫煙防止教育 ・薬物使用防止教育の実施 ・生徒の発達段階に応じた性教育 ・DV予防教育の実施 ・学校生活様式の改善	・生徒の実態に応じ、保健の授業等で喫煙の害・正しい性に関する知識や考え方を養う。 ・講演会を実施し、専門家の講話から知識を深めるとともに意識を高めさせる。 ・手洗いやマスクの着用、トイレの使用等の新たな生活様式の改善・実施し、感染症予防の意識を高める。	・健康な生活を送るために、適切な判断や行動がとれるよう具体例を示す、ロールプレイングを行うなどして指導する。 ・講演会で専門機関と連携し、指導する。 ・登校から下校までの教師の指導の徹底と生徒の自主的、主体的な予防意識を高められるよう工夫する。	・保健の授業を通して健康で安全な生活を送るための知識を知ることはできました。しかし、その知識を生かして、生活の中で予防できたり実践したりするところまでは至っていません。実生活で役立つ力を身につけさせたいです。 ・緊急事態宣言の解除、感染者数の激減で意識が低くなりがちです。これまでやってきたことを徹底したいです。	2	・新型コロナウイルス感染防止対策の為、集まって講演会を開いて講義を聞いたりすることが難しいため、各学年の保健授業を通して、健康や安全について学んだ。健康で安全な生活が維持できるような知識を学ぶことはできたが、スポーツや運動に親しんだりすることは十分には達成出来なかった。 ・新型コロナウイルス感染防止対策をとりながら、運動を通して仲間と人間関係を築き心も体も成長できたかといえば不十分だと感じる。教師・生徒共に、換気や手洗い、活動時の行動様式の工夫をしながら、互いに人間関係を育み向上していける取り組みを工夫していかなければならない。
	18　食に関する指導　上月	・健全な食生活を送るための知識や技能を身につけ、実践しようとする生徒の育成	・学校給食を通して「食と健康」への関心を強め、食に関する知識を身につけるとともに、マナーを守って楽しく食事する態度を養い、感謝して食べる意識を育てる。 ・各教科の授業やHR,ST等において、食育に関連する単元や内容の指導を工夫し、折に触れて話題にするとともに、体験活動を通じて生活に活かせる力を養う。	・生徒会給食部のポスター作成や呼びかけ等の啓発活動や給食コンクールを実施する。 ・感染予防を意識し、クラスや給食コンテナ室での統一した教師の支援を行う。 ・講話、調べ学習、実習等、学んだことを自分の食生活に活かせるような学習活動を工夫する。 ・「和食給食の日」など加東市の食育への取組と連携した活動を進める。	・「かとう和食給食の日」に生徒会給食部による和食クイズを行った。 ・11月の「和食の日」には社高等学校の生活科学科の学生に和食に関する話をしてもらったり、タブレットを使用した和食クイズをおこなったりした。 ・給食コンテナ室での消毒を欠かさず行うことが出来た。 ・前半は新型コロナウィルス感染防止の為、調理実習等の体験的な活動ができなかったが、緊急事態宣言の解除後は調理自習も再開できた。 ・調理実習が学校でできない期間は、家庭での調理する課題に取り組ませた。	3	・「かとう和食給食の日」では、生徒会給食部と連携して和食クイズを行ったり、行事食に関するプリントを作成し配付したりする事が出来た。 ・給食コンテナ室では入室時に消毒を欠かさず行うことが出来た。今後は教室での手洗いや消毒、黙食の呼びかけなどを強化していきたい。 ・新型コロナウィルス感染防止の為、調理実習等の体験的な活動が制限されたが、代わりに家庭での調理する課題に取り組ませた。 ・食生活に行かせる学習活動は、一部の教科に偏ってしまっている。どの教科でも食生活に繋げた学習を取り入れて行けるように教科担当の先生に呼びかけをしていきたい。
	19　個に応じた体力の向上　村田	・スポーツへの関心を向上・体力の向上	・生徒の発達段階等に応じて指導し、スポーツの楽しさを感じさせることができるようにする。 ・昨年の体力テストの結果や授業の様子を見て、生徒の実態に合った指導を充実する。	・授業、部活動で段階的指導を行う。 ・体つくり運動の工夫をする。	・運動能力テストを実施し、結果を生徒に返し自分の体力を確認させた。また、部活動でも指導していくきっかけになればと思い、その結果を部活動顧問にも渡した。しかし、集団として意識を与えたとしても、生徒一人ひとりの実態に合った指導が十分ではなかった。 ・運動能力テストの時期が入学直後に行ったため、1年生は個々の能力を十分に発揮できなかったため、時期を考えていく必要がある。	3	・新型コロナウィルス感染防止対策をとりながら、体育の授業を行うことができた。その中で段階的な指導を行いながら生徒は技能向上に努めることができた。 ・新型コロナウイルス拡大防止対策として、密になることを避けたことで、あまり話し合い活動を取り入れることができなかった。一方で、ワークシートを活用することで、考えを深めることができた。

令和3年度　学校評価シート

学校教育目標	「向上心」 ー夢を抱き　自ら学ぶ　心優しくたくましい生徒の育成ー	重点目標	・子どもたちが楽しく学べる安心・安全な学校 ・教職員がいきいきと教育活動ができる学校 ・保護者・地域から信頼される学校

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	具体策	中間評価	自己評価 4点満点	成果及び改善策
Ⅳ　課題教育	20　生命の尊重と安全教育の充実　大本	・無事故・無違反で自転車登下校する意識の醸成 ・安全で安心な学校生活を送ることができる環境作り	・ヘルメットの着用と荷台に鞄を固定することを徹底させる。 ・一列で通行することや横断歩道で一旦停止・安全確認の上、歩いて通行することを徹底させる。 ・通学路を遵守させる。 ・交通ルールを守り、安全な運転をすることを徹底させる。 ・ルールの遵守だけでなく、状況に応じて臨機応変に対応できるようにさせる。	・全職員による下校指導や交通立番指導を徹底的に実施することにより、安全な登下校の確認と啓発を実施する。 ・ノー部活デーの日を中心に交通立ち番をし、生徒の安全な登下校を見守る。 ・生活部校外の週番活動を活性化させ、生徒が主体的に安全意識を高められるような工夫をする。	・ヘルメットの着用やカバンを荷台にくくりつけるといった点は、ほぼすべての生徒が徹底できている。 ・2列通行や、小学生等の横を通り抜ける際に自転車から降りて安全確保を行う、といった点ができておらず、数件の事故が発生してしまっている。	3	・ヘルメット着用と鞄を荷台に固定することは、徹底できている。 ・一列通行・横断歩道降車については意識の低下が見受けられる。 ・通学路の確認・変更があり、生徒・教職員含め曖昧になっている所がありそうなので、4月の校外生徒会の際にはまず教師がしっかり確認しておき、周知できるようにする。 ・鍵の抜き忘れは減少している一方で、同じ生徒が何度も抜き忘れる状態がある。生活部校外部委員等と改善策を考える必要がある。
	21　国際理解教育（異文化理解）　桜井	・授業を通して他国の言語・文化に対する理解を深め、積極的に異文化について知ろうとする態度を育成する。	・授業を通して積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。・英語の授業を通して、他国の文化・伝統に興味を持たせる。	・ALTとの授業で、スピーキング活動を充実させる。 ・ALTが作成した掲示物を校内に掲示する。	・授業内では、積極的にALTと会話をしたりゲームをすることが出来ている。 ・ALTが掲示物を作成することは出来ていないが、生徒の作品を見てもらい、評価をしてもらった。	3	・一年を通して、ALTとの会話が増えたり、ゲームをすることで意欲にもつながり、生徒の英語に対する意識が高まった。 ・来年度は、さらに会話が充実するような取り組みや、自分から勉強したいと思えるような授業にしていきたい。 ・掲示物については、生徒の作品を掲示したりできている学年があった。来年度、全学年で取り組むなど企画していきたい。
	22　体験活動の充実（トライやる・ウィーク）　澤田	・生徒が充実して「トライやる・ウィーク」に臨むことができる体制づくり ・生きる力を育む	・「トライやる・ウィーク」の取組の中で、将来の進路や職業についての意識を高めさせる。 ・社会で生活していく上で必要なコミュニケーションの取り方や社会人としてのマナー、態度、礼儀を身に着けさせる。 ・3校が連絡を密にし、足並みをそろえて実施できるよう取り組みを推進していく。	・総合のキャリア教育を通じて、将来自分が「なりたい」姿について考え、目標を持って生活できるようにする。 ・「トライやる・ウィーク」の取組や普段の学校生活の中で、規律のある生活やあいさつ、礼儀への意識を高め、本番に向けて準備をする。	・短い事業所でのトライやる・ウィークの活動はできなかったが、現在は代替活動を計画している。	3	・新型コロナ対策を考えながら、今までの取り組みを練り直しながら進めていくのは、大変な労力と時間を必要とした。もう少し弾力的な取り組み方が必要だと感じた。 ・代替行事として取り組んだグラウンド・ゴルフ大会は、参加者全員が楽しみながら交流できる行事となった。
	23　読書活動の推進　高見	朝の読書活動を中心とした読書習慣の定着・図書室の活性化をはかる。	・朝の読者の時間に主体的に読書を楽しむ習慣をつけるとともに、静かな雰囲気の中でSTを開始する。 ・読書習慣の定着に向け、読書の楽しさや有効性をしっかり説くとともに読書環境を整備していく。 ・図書室の利用者数が増えるように蔵書を充実させる。	・月に1回、図書部員が学級文庫の選定をし、学級に図書室の本の紹介をしていく。 ・図書だよりや掲示物などを通じ、全校生徒におすすめの本や図書室の紹介をすることで、利用者数を増やせるようにする。 ・生徒や教職員等、多くの人の意見を取り入れて選書することで、蔵書の偏りを避け、図書の充実をはかる。	・図書部員の学級文庫の選択については、学級の仲間の趣向を取り入れながら、工夫して選択する姿が見られたので、今後も継続していきたい。 ・図書室の利用者数は昨年度より増加傾向にあるが、図書室の利用マナーが悪い者もいる。公共の場、知識や教養を身につけられる憩いの場として全校生徒が安心して利用できるように、今後も意識させていきたい。 ・選書については、生徒・教職員の協力を得ながら、幅広い分野の本を選ぶことができている。	3	・多くの教職員や生徒の協力を得ながら、選書をすることができ、図書室の利用者が増加したことは大きな成果であった。 ・図書部員や教職員の呼びかけにより、図書室の利用マナーも改善することができた。また、机と椅子の配置場所を変えたり、換気を徹底することによって、コロナ禍でも安心して本を読む環境が提供できた。 ・今年度から図書の購入先が変更になり、本の購入・搬入に当初の予定より時間がかかった。来年度からは、発注を更に早める必要がある。
Ⅴ　望ましい集団づ	24　部活動の充実　岸本	・運動・文化への興味・関心の向上	・生徒の発達段階等に応じて指導し、スポーツ・文化の楽しさを感じさせることができるようにする。 ・各顧問が適切に休養日（ノー部活デー）を設定し、合理的な指導を目指すようにする。	・個々の生徒に合った段階的に指導を行う。 ・休養や規則正しい生活は、ケガの防止や技術向上に効果があることを理解させて、指導する。	・多くの部活動が活発に活動できている。 ・ノー部活デーがしっかりと実施されている。休日に大会がある部活動は、振り替えて休みを設定することができている。	3	・大きな怪我もなくどの部も活動することができた。また、部内で感染症が広がることもなく活動することができた。 ・各部ノー部活デーがしっかりと実施できた。土日続いて大会がある部に関しては、4週以内にノー部活デーを割り振ってもらい休養日を設定できた。
	25　特別活動（学校行事など）　岡田	リーダーを中心とした生徒の主体的な活動による学校行事の充実と活性化	・学校行事の成功に向けて、全校生徒が共通の認識を持って取り組む。 ・各行事で活躍できる学級や学年のリーダーを育成する ・リーダーを中心として、生徒が主体的に企画・運営を行う行事作りを目指す。 ・全生徒が共通の目標に向かって力を発揮することで、集団としての団結力を高める。	・生徒の主体的な取り組みとなるよう、企画・運営を生徒会が中心となって行う。 ・MTや評議委員会などを利用し、リーダー以外の生徒たちも、主体的に行事に参加できるようにする。 ・体育大会、文化発表会の企画、運営	・Meetや放送を利用して、コロナウイルス感染対策を行いながら行事を行い、生徒が主体的に考え、工夫して行事を運営していく機会を持たせることができている。 ・生徒会中央委員が中心となり、評議会を開催するなどして、生徒が学校を運営する活動が行えている。 ・全校生徒が一堂に会し、行事を行うことができないことが増え、集団として団結する機会が減っている。	3	・コロナ禍で学校行事が縮小される中、生徒の主体的な取り組みによって行事が行えていた。感染対策などを踏まえ、生徒自身が考え、工夫をしながら行事を行えたことに意義がある。 ・来年度以降もコロナ禍により、学校全体で行う行事が縮小されるのであれば、学年行事の充実を図るなどして、自治的な活動を行わせる場を確保したい。 ・行事の精選やコロナ禍による計画の変更など、課題や懸念は多くあるが、行事を通してメリハリのある学校生活を送ることができるよう、議論や工夫を重ねていく。
	26　生徒会活動　岸本	生徒会活動の充実 生徒同士の繋がりや主体的な活動を通したより良い学校づくり	「つみき～新たな伝統を一人ひとりの個性(カタチ)で創る社中～」 ・学校行事を成功させ、社中の良き伝統を育てていく。 ・生徒一人ひとりが生徒会活動に参加しているという意識を持ち、意見が反映されていく生徒会活動を目指す。	・あいさつ運動の実施 ・MT・壮行会などでの学校全体の取り組み ・専門部活動の活性化 ・計画的な学校行事の計画・立案 ・SNSルールの周知と徹底に向けた取り組み	・生徒が主体となって活動に取り組むことができている。 ・今までになかった体操服登校の実現に向けて朝立ち番をしたり、各クラス正副委員長と連携して調査したりと規律正しい社中生を目指して取り組んでいる。 ・4校交流会では、SNSについて話し合いをし、加東市中学校SNS統一事項を策定した。	3	・毎週、生徒会で挨拶運動を実施することで、活気ある学校生活にするための取り組みができた。 ・体育大会やMT、専門部会など生徒会が中心となって運営することができた。 ・来年度は、専門部ごとにどのような取り組みをしているか誰もが認識できるように視覚化し、専門部委員だけでなく全校生が取り組みに参加できるようにしていきたい。
	27　学級活動　岡田	互いに認め合いながら切磋琢磨し、成長していける学級づくり	・生徒の内面理解を心がけ、信頼関係を築く。 ・生徒一人一人がお互いを認めあえる温かい学級づくりに努める。 ・学級活動を通して、生徒一人一人が自分の役割を果たし、帰属意識を高める。また、社会の一員として必要な資質を育てる。	・QUに関する研修を生かして効果的な支援ができるよう、学年全体で検討、実践していく。 ・協同的な学び生かした、班活動や話し合い活動を日常生活の中で取り入れていく。 ・授業だけでなく学校生活全般において班での一人ひとりの役割を意識させる。 ・計画帳や個別指導を通して1人1人とのコミュニケーションを図っていく。	・QUアンケートの結果を用いて研修を行い、学年団が効果的に生徒理解や生徒支援に努めることができている。 ・コロナウイルス感染拡大防止の観点から、班活動の機会が減っているが、タブレット機器を用いて、生徒の意見交流が活発にできるよう工夫ができている。 ・係活動や専門部活動を活性化させ、生徒一人一人に帰属意識や自己有用感を持たせることができている。	2	・QUアンケートを用いて、学年職員間で生徒理解を深める取り組みは、今後も続けていきたい。 ・コロナ禍による班活動の自粛により、生徒の関わり合いを制限することが多かったように思う。生徒間の微妙な人間関係を把握したり、生徒の心の持ち様や変化を感じ取ったりするきっかけが減っているように感じる。感染予防対策を行いながら、学級での関わりを増やしたり、生徒が活躍できる場面を意図的に作ったりしていく必要がある。

令和3年度　学校評価シート

学校教育目標	「向上心」 ー夢を抱き　自ら学ぶ　心優しくたくましい生徒の育成ー			重点目標	・子どもたちが楽しく学べる安心・安全な学校 ・教職員がいきいきと教育活動ができる学校 ・保護者・地域から信頼される学校		
領域	評価の観点	評価項目	実践目標	具体策	**中間評価**	自己評価 4点満点	成果及び改善策
学級づくり	28　望ましい学年集団づくり 則包	自分結実　～自分の進路を自ら切り拓く自分づくりに挑戦～	・自慢できる学年をつくろう ・最高学年としての自覚を持ち、自らの行動で規範を示すさわやかな自分を目指そう。 ・仲間と温かいつながりを築くなかで、切磋琢磨し合い、成長を自覚しよう。 ・SDGsの活動を通して改めて、「個性を認め、共生していく仲間づくり」を目指そう。	・チャイム着席を意識させ、学習規律の定着。　・挨拶、返事、掃除、時間厳守の4大目標の徹底。 ・進路選択を踏まえた土台作りとして、学習意欲を喚起しながら、家庭学習につなげていく。 ・部活動を通して、体力・忍耐力の向上や後輩の指導を通じて充実感を味わわせる。 ・ジェンダーに関する課題にはおいては、その都度教師と生徒が共に考え、解決策を模索していく。 ・学年通信、学級通信の発行による学年、クラスの状況の発信	・コロナ禍の下、中央委員、専門部部長たちは、自分たちの責任を自覚し学校全体を見渡しながら地道な活動を行っており、日々達成感と充足感を味わいながら成長していると思う。また、リーダーたちを支える大勢の生徒たちの協力体制も強固になり、学年全体が徐々に引き締まってきた。体育大会、修学旅行の成功は、学年の成長において、多大な影響があったと思う。　・学習面では、精力的に取り組む生徒が多くなり、今後の進路決定に期待したい。 ・不登校生徒の頑張りが表面化してきているのが嬉しい。 ・学校生活では委員長会の活動を活発なることを期待したい。	3	**・自分結実**「自分の進路を自ら切り拓く自分づくりに挑戦」を学年目標に掲げ学年教師一人一人が1年間生徒を指導してきた。その成果としては、保護者の協力の下、生徒たち自身が常に自分と向き合い、今日まで歩んでこれたと思う。その過程で一人一人の心の成長は大いに感じられる。 ・思いやりの心と互いの個性を尊重しようとする態度を一人一人が持てるようになり、4クラスがそれぞれに良い学級に成長した。 ・委員長会の活動がやや消極的になってしまった。 ・入学してからの3年間で一人一人が成長し、学年集団としての意識も向上させることができた。
	望ましい学年集団づくり 澤田	束ね（たばね）　～　個々のつながりを、より強固な集団力へ　～	・基本的生活習慣を身に着けさせ、個人の力を上げる。 ・学習に向かう雰囲気作りを行うとともに、個々の学力の向上をはかる。 ・生徒同士をつなぎ、集団として成長していこうとする雰囲気作りを行う。 ・教師同士がつながり、教師集団として指導に当たっていく。 ・保護者と学校がつながる。	・5分前行動やチャイム着席など、時間を意識した早めの行動を行い、落ち着きのある生活をさせる。 ・家庭学習の習慣づけを行う。 ・リーダー会等を通して、生徒自らが自分たちの課題を見つけて改善していこうとする場を設け、自分達で成長していこうとする姿勢を育てる。また、自分達で声かけを行える雰囲気づくりを行う。 ・学年通信等を発行し、学校のようすを家庭に知らせ、保護者の理解と協力を仰ぐ。	・時間に関する意識はかなり高まってきたように思う。チャイム着席等はほぼ完ぺきにできている。 ・リーダー会を中心に、いろんな行事の司会等の役割分担を数多く行わせ、リーダーとしての経験を積ませている。また、学年の課題を自分たちで考えさせ、改善するための取り組みを行っている。まだまだ問題意識が低いので様々な場で話をしていって、心を耕さなければいけないと感じる。 ・学年通信は、少し発行数が少なかったように思う。今後、もう少したくさん出したい。 ・学習に対する意識を高める取り組みをしていきたい。	3	・学年通信を2学期末に続けて出せたが、あまり出せない期間も多かった。行事のないときも定期的に学校の状況を伝えれられるようにしていきたい。 ・進路学習の成果もあり、進路・学習に対して意識が高まってきたように思う。今後、家庭学習の取り組みができればと思う。 ・体調不良等もあるが、遅刻・欠席者が増えてきている。
	望ましい学年集団づくり 井澤	新しい自分づくりに挑戦 ～充実感と達成感～	・基本的生活習慣の定着を図る。 ・仲間との温かい関係づくりに励む。 ・新しい自分を見つける。 ・自分の役割を責任をもってやり遂げる。	・挨拶や時間を守る、掃除などの生活習慣の意識を高める。 ・生徒一人ひとりを大切にした丁寧な対応をする。 ・小さな成功体験を大切にする。 ・自分にあった目標を立てる。	・生活習慣が少しずつではあるが身についてきた。特に挨拶や 時間厳守に成長がみられる。 ・失敗しながらも、あきらめず成功に結びつける場面には、ま だ少し時間がかかると思われる。また、そのせいか人間関係 も希薄な部分がある。 ・テストや学年での月目標など、背伸びをせずに振り返りでき ることが増えてきた。	3	【成果】 ・最初に比べ、落ち着いた学校生活を送れる生徒が増え、基本的な生活習慣も身についた。 ・4役会を中心に1学年全体がまとまりを持って物事に取り組み、温かい関係づくりに励んだ。（学年集会、月目標、ドッヂボール大会など） ・小さな成功体験を互いに賞賛できた。（わくわくオーケストラ） 【課題】 ・一人一人の目標づくりへの意識向上 ・小さな成功体験のより多くの設定 ・リーダーの育成